

# 幼稚園の飼育動物を介在した教育 (AAE) に関する研究

—幼稚園の高齢化した飼育ウサギと幼児とのかかわりを通した心の育み—

掛 志穂 森脇 有紀 池田 明子 森元 真理  
木場 有紀 谷田 創

## 1. 研究の目的と背景

本研究では、附属三原幼稚園の高齢化したウサギと幼児とのかかわりについて、保育学・動物介在教育学・人間動物関係学の観点から観察・考察することで、幼児の心を育む支援のあり方を明らかにすることを目的とした。

動物介在教育 (AAE) とは、「動物を教育の場に介在させた教育全般を指すもの」と定義されている。子どもの動物への興味と関心を媒介として、その心の窓を開放することで、他者に対する共感性を育み、個と個の関係性を向上させることを第一義として、さまざまな取り組みが実践されている。一方、幼稚園教育要領の「環境」領域「ねらい」にも「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」ことの必要性が明記されており、飼育動物を通して幼児の心を育むことが求められている。しかし、幼稚園では飼育動物を介在した教育のための具体的な指針となるものがほとんどないために、保育者が動物を飼育することに対して大きな不安を感じていることが多いという現状もある。

本園は、広島大学大学院生物圏科学研究科と長年にわたり共同研究を継続してきており、保育学の観点と動物介在教育学・人間動物関係学の観点にたちながら飼育動物と子どもたちのかかわりを支えてきている。特に現在は、飼育している2羽のウサギが高齢化しており、若くて健常なウサギよりもさらに緻密で適切な飼育管理が必要とされている。そこで本園の子どもたちがこのウサギたちにかかわることを通して、子どもたちの心にどのような育みが形成されるのかについて、異分野を融合した観点から明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究の方法

本園で現在飼育しているウサギは、幼獣の時から世

話をしている「キララ」と「ナナ」の2羽である。いずれも2005年生まれの9歳で、人間の年齢に換算すると80歳程度である。キララは環境の変化に過敏であるので、3年前より園庭の飼育小屋から職員室内のケージに移して飼育している。一方、ナナについても高齢化の現状を考えて、冬季は職員室に移動させてケージで個別に飼育しており、本園の年長児が当番活動として、毎日交替で掃除とエサやりを中心とした世話をしている。

そこで主な研究方法として、年長児が職員室のウサギたちにかかわっている様子を参与観察することで、子どもたちの行動と発話をそれぞれのエピソードとして記録し、そのデータに基づいて、幼児の心の変化について考察することを試みた。

## 3. 結果と考察

### 1) 2013年5月

#### (1) エピソード1

冬の期間は年長児保育室内でナナを飼っていたが、そろそろ暖かくなってきたので、教師はナナを園庭の広い飼育小屋に戻した方がよいと考えた。

そこで、子どもたちに「ナナちゃんねえ、お年寄りだし、今年の冬は寒かったから、ずっと暖かい飼育ケースでお世話してきたんだけどね、そろそろ外も暖



保育室のそばで飼ってるよ



外のサークルに放したよ

かくなってきたし、ここは狭いし、どうする？」と言葉を投げかけてみた。すると、子どもたちも「緑のサークル（外の飼育小屋付近にあるウサギ用のサークル）のところがいいんじゃない？」「あっちの広いところ（園庭の飼育小屋）がいいんじゃない？いっぱい動けるし」「広い所がいいと思う」「(以前の) 大きい組がやってたみたいに、あっち（園庭の飼育小屋）で飼って、掃除の時だけ緑のサークルのところがいいんじゃない？」と答えた。そこで、園庭の飼育小屋に移動させることにして、小屋を掃除しながら、その間にナナをサークルに入れることにしたところ、サークルの中に生えている雑草を食べ始めた。そのことに気づいた子どもたちが「よう、草食べようねえ」「おいしいんじゃない？」「気持ちいいって言うてるんじゃない？」とつぶやいていた。

## (2) エピソード1の考察

現在の年長児が年中児だった1年前は、まだウサギを外の飼育小屋で飼っていることが多く、当時の年長児は外の飼育小屋を掃除している間に、ウサギをサークルの中に放していた。子どもたちはそのことをよく覚えていたのだろう。教師自身も狭いケージの中よりも、できるなら草のたくさん生えているサークルの中や広い飼育小屋で飼育する方がウサギにとっては望ましいのではないかと考えていたので、そのことに子どもたちも気づいているのかを確認するために上記のエピソードのような言葉がけをした。その結果、子どもたちは年中時の経験と今回の教師の言葉を関連付けることで、ウサギの立場に立って（ウサギに配慮して）、ウサギにとって心地よい空間を考える心が芽生えたものと考えられる。

## 2) 2013年6月

### (1) エピソード2

6月になり蒸し暑い時期がやってきた。外の飼育小屋は毎日夕方になると強い西日が差し込むので、高齢のナナにとっては過酷な環境になっているのではないかと教師は心配していた。そこで、子どもたちに「みんなが幼稚園から帰った後、ナナちゃんのお家に太陽の光が当たってすごい暑いよ。どうしたらいいと思う？」と問いかけたところ、「扇風機



ゴーヤのグリーンカーテン

をつけたらいいよ」「氷は？」「風鈴をつける」「先生のお部屋に行ってキララちゃんと一緒にさみしくないようにしたらいいよ」「屋根付けたらいい」「横に屋根付けたらいい」「カーテンみたいな」「なんか、こんな（すだれ）したら？」というような声が出てくる。ちょうど、園芸サークルに所属する保護者がゴーヤを育てようとしていたので、「すだれねえ。緑の葉っぱですだれみたいにしてあるの見たことない？」と子どもたちに聞いてみたところ、「知ってる！グリーンカーテンって言うんよ。ママが言った」という子どももいた。そこで、サークルの保護者の皆さんに、子どもたちの前で、飼育小屋の西にゴーヤの苗を植えてもらう場面を設けることとした。保護者の「みんな、水やりしてね。ゴーヤのグリーンカーテンだよ。早く大きくなるといいね」という声に、「これでナナが涼しくなるといいねえ」と言い添えた。

### (2) エピソード2の考察

これまでは、西日の暑さが気になり始める頃になると、教師だけで飼育小屋にすだれを設置していた。しかし今年度は、ウサギの適切な飼い方を子どもたちと共に考えることが子どもたちの心の育みにつながると考えた。また、偶然ではあったが、園芸サークルに所属している保護者の皆さんがゴーヤのグリーンカーテンを作ろうと計画されていたので、そのタイミングを見計らいながら子どもたちに言葉をかけることとした。子どもたちは教師の言葉がけがきっかけとなって、自分たちの日々の生活と関連付けながら、どのように振る舞えばウサギのためになるのかを真剣に考えている姿が認められた。ウサギにとって適切な飼育の仕方を子どもたちに考えさせるには、単なる知識だけを教えるのではなく、自分の毎日の生活と関連付けさせることができるように、内容とタイミングを工夫することが重要であると考えられた。

## 3) 2013年7月



元気がないナナ

### (1) エピソード3

猛暑が続き、ナナの元気がなかったので近隣のかかりつけの動物病院に連れていったところ、熱中症のような症状にあり、現在よりもさらに涼しいところで飼う方がよいという診断であった。グリーンカーテンでも高齢ウサギの暑さ対策には十分ではなかったようで

ある。大学の共同研究者（大学院生物圏科学研究科所属の動物を専門とする研究者）に相談したところ、次のようなメールで返信されてきた。

ナナちゃんは老齢でもあり、今年の夏が酷暑であることを考慮に入れますと、クーラーのきいた室内で飼育した方が良くと思います。また、高齢な動物は日に何度も飼育場所を移動されることをきらいますので、できれば職員室で継続的に飼育されることをお勧めします。キララちゃんもすでに職員室で飼育されていましたね。となると、職員室にもう一つのケージを入れて個別飼育してあげてください。夜は、最後の人が帰宅されるまでクーラーを入れておいて、その後はケージに凍らせたペットボトルなどを入れて冷やしてあげましょう。園庭の飼育小屋はグリーンカーテンをしてもやはり暑いと思います。そこで一度温度計を小屋に置いて温度を計って見てください。かなり高くなることにびっくりされると思います。今夏は人間でも高齢者が熱中症などで死亡されるケースが多くなっておりまして、ウサギさんについても同様に配慮してください。

このメールの文章を“ウサギの先生”からの手紙ということにして、子どもたちの前で読んだところ、みんな真剣な表情で聞いていた。手紙を読んだ後に、「ナナはもうお年寄りだから、あっちこっち行ったり来たりしない方がいいんだって。どこがいいかねえ？」と問いかけてみたところ、「お部屋（自分のクラス）に置いとけば？涼しいよ」「先生の部屋に置く？キララちゃんもいるからさびしくないよ」という声が子どもたちからも出てきたので、クーラーの温度調節をして、キララもいる職員室でナナを飼うことに決定した。



外の飼育小屋は37℃

夏休み明けも、ウサギのことが気にかかる子どもたちが職員室にいるウサギの様子を見に来た。「キララ、死にそうなんかねえ」「暑いけえよ」「うんちも下痢みたいじゃし」「なんかナナの方が元気なような気がする」「ナナは動きよるけえね」など友だちと会話を交わしながらウサギの様子を見ていた。

また、実際に子どもたちと飼育小屋の温度を計ってみると、なんと37℃もあった。意外な暑さに教師も子どもたちも驚き、改めて「やっぱり先生の部屋に連れていくのがいい」と全員で納得した。

## （2）エピソード3の考察

熱中症症状を起こしたナナについて大学の共同研究者（動物を専門とする研究者）に相談することで、以下の4点が明らかとなった。

- ① 高齢な動物は日に何度も移動させない方がよい。
- ② ウサギは1羽ずつ個別で飼育する方がよい（ただし近くに仲間（キララ）がいることが望ましい。
- ③ 夜は、クーラーの代わりに凍らせたペットボトルをケージの中に入れて冷やすとよい。
- ④ 園庭の飼育小屋はグリーンカーテンなどの対策をしてもウサギにとってはまだ温度が高い。

これらの知識について、言葉がけでなく、実際に温度計を用いたり、飼育小屋に行ったりして考えさせることでエピソードにも示したような子どもたちのウサギに対する配慮の姿勢が育まれるものと考えられた。例えば、子どもたちの発話の中には、①ナナちゃんを暑い間はどうしたらいいのかという問いかけに対して、「キララちゃんが一緒だとナナちゃんもさびしくない」という発話、②夏休み明けにウサギの様子を見に来た子どもたちが、ウサギの様子をこまかく観察し、“暑いから元気がないのではないか”との推測、③その後の飼育当番でケージを掃除する際には、ずいぶん慎重にケージを動かすようになった行動などが認められた。

動物介在教育学・人間動物関係学の立場から、教師がかかわりやすい具体的な飼育方法を教えると、子どもたちは自然に適切な飼育方法を身につけて行動するようになり、またウサギの立場を思いやる心が育まれることが明らかとなった。特に、園庭の飼育小屋が予想以上に温度が高いということは実際に温度を計ってみて初めて分かることであり、教師自身も大変驚いた。このような経験を通して、子どもたちも教師も、高齢のウサギにとって園庭の飼育小屋は大変過酷な状況である事を実感した。

## 4) 2013年10月



ウサギの先生こんにちは

## （1）エピソード4

前述した大学の共同研究者が“ウサギの先生”（人間ではなくウサギの国からやって来たウサギの先生を意味する）と称して来園し、子どもたちと話す場を設けた。

(以下の会話 T：大学の先生 C：園児)

T「ウサギの国からやってきました。今日はみんなに会うために人間の姿になってきました。みんなはウサギさんが好きですか？」

C「はあい！」

「ナナとキララがね、病気なんよ」

T「みんなが病気になったら、どうする？」

C「お医者さんに行く」

T「ナナもキララも一緒だよ。お医者さん行って、その後も大切にお世話してあげるんだよ」

C「ごはんはいつあげたらいいの？」

「夜もちょっとあげたら？」

T「ウサギさんはね、一日2回、朝と夕方ご飯を食べるんだよ。ウサギさんの様子をよく見てね、すぐ全部食べてしまったらあげる量が少ないってこと。残ったら多すぎるってことだよ。全然食べなかったら気分が悪いんだよ。だからいつも注意して見ててね。食べ残した古いお野菜は捨てて新しいのかえてくださいね」

C「お薬は何で小さいの？」

T「みんなから見たら小さいかもしれないね。でもナナの体はみんなよりもとっても小さいから、ナナにとってはかなり大きいんだよ。みんなだったらこんな大きなお薬飲めるかなあ？飲めないよね。だから飲みやすいように水で溶かしてからあげてるんだよ」

C「草むらで散歩させてもいいですか？」

T「外に出してあげたいの？ナナは人間でいったら何歳か知ってる？80歳だよ。おばあさんウサギさんなんだよね。病気もするし、元気がないこともあるよね。みんなみたいに若くて元気だったら毎日外に行きたくなるんだけど、おばあさんだから家にいるほうが幸せなんだよ」

「ナナとキララは、ウサギの国で先生たちの仲間だったんだよ。だからこれからも大切にしてくね」

このウサギの先生の来園後、特にエサのやり方に対する子どもたちの意識が高まった。具体的には、一日2回、朝と夕方にごはんを食べるといった話が強く印象に残っており、当番活動の際に、そのことに関する会話が見られるようになった。

- ・「エサ分ける。だってウサギの先生が朝と夜2回って言ってたから」
- ・「先生、どうしよう！だって、ウサギの先生がナナとキララは夜も食べるって言ったじゃん？でも私たち（夜は）幼稚園にいないよ」
- ・「先生、お願いだからナナとキララの夜のご飯頼む

よ！」その後も毎日「頼むよ」と言っていた子どもからは「先生、いつも大変だね。でも今日もよろしくね。ナナとキララのためだからね」と教師を気遣う発話も認められた。

- ・残っている白菜を見て、「これ捨てるの？」と教師に尋ねる子どももいた。教師が「どうしてそう思うの？」と聞き返すと子どもは「だって、ウサギの先生がご飯残ってたら捨ててねって言ってたし、古いのだめって」と返答した。「そっかあ。ウサギの先生の言ったことよく覚えていたね。じゃあどうしよう？」と相談すると、当番になっている4人の子どもたちで「もったいないよね」と話し合いながらも、結局「もったいないけど、病気になっちゃあいけないから捨てよう」という結論になった。

この頃から、各ウサギに対して餌箱を2つ用意して、子どもたちが朝用と夜用に分けることができるようにした。当番になった子どもたちは「こっちは夜用ね」と言いながらケージの上に置いてある餌箱にエサを分けて入れる姿が見られた。

また、大学の共同研究者から幼稚園の教師に対して次のようなアドバイスがあり、それを子どもたちにも伝えた。

- ・ウサギは落ち着きたい時は薄暗い場所を好むので、ウサギを休ませたい時や人の出入りが多い時は、ケージの上から布や段ボールをかけることで、ウサギが安心して落ち着くようになる。また、布や段ボールをかける箇所は、全体ではなくトイレの部分を含めて上半分程度がよい。人間と一緒にトイレは薄暗い方がよい。
- ・キララとナナはそれぞれにケージに入っているが、キララのケージが少し狭い。理想的なケージの大きさは、ウサギが寝そべる場所が何か所かあるくらいのスペースである。また、床の高さも少し高めの方が、望ましい。
- ・キララとナナのケージは並べて置いてあるが、中の餌箱が向かい合うようにすることで、キララとナナが互いを認識できるようになる。

## (2) エピソード4の考察

“ウサギの先生”との対面は子どもたちにとって初めての体験であった。これまで子どもたちが教師と共に考えたり疑問に思っていたことを、ウサギの先生に積極的に尋ねる姿が見られた。“ウサギの先生”は、子どもたちの質問に対する答えだけでなく、ウサギの先生の立場として気づいたことを、具体的な方法にして

理由を説明しながら伝えたので、子どもたちにとっても非常に分かりやすくなったのではないかと思われる。特にウサギの立場を人間に置き換えて話したことで、子どもたちや教師にも理解しやすかったものと考えられた。ウサギに対する思いやりの心を育むためには、ウサギの立場を人間に置き換えながら理解できるようにする工夫や、ウサギに対する適切なかかわり方の根拠となる理由をきちんと添えることが明らかとなった。

また、“ウサギの先生”とのやりとりを通して、自分たちで取り組みそうなこと（ここではエサを朝用と夜用に分けること）について関心が向けられる姿が見られた。そこで餌箱を二つ用意することで、実際にエサを朝用と夜用に分けていれる姿が見られるようになってきた。このことから、子どもたちがウサギへのかかわり方に対する情報を得た際に、具体的にどのようなことに心動かされたのかについて、子どもたちの行動や発話から推察して、その子どもの思いを実現できるように環境を整えることが必要であると考えられた。

## 5) 2013年10月

### (1) エピソード5

ウサギの先生に教えてもらったことの中で、キララの家が狭いという課題があったので、子どもたちとその解決策について考える場を設けた。子どもたちからは、「みんなでお金持って来て買おうや」「おれ100円ある!」「おれ20円!」という声が出てきた。そこで教師も参加して幼稚園で買おうということに決定した（本研究から支出した）。

しばらくして、ウサギの先生から次のようなお手紙と共に、新しいケージが届いた。

キララちゃんのお友だちのみんなへ

こんにちは。ウサギの先生です。最近寒いけれど、みんな元気ですか？ウサギの国のウサギ村ではウサギさん達が毛をモコモコにしてお家の回りに風よけを立てて冬の準備をしています。

今日はキララちゃんから「お友だちが、私のお家がせまいから私が病気にならないか心配しているの。どうしたらいいかしら？」と聞いたので（ウサギ村のウサギさん達はウサギテレパシーを使うと離れていてもお話できるのです）、みなさんにお手紙と新しいお家のプレゼントを送ることにしました。キララちゃんとみんなが喜んでくれると嬉しいな。

みんなが私の仲間のキララちゃんのことをたくさん心配してくれているので、とても嬉しいです。これからも「キララおばあちゃん」を大切にしてい

てね。

ウサギのせんせいより



ウサギの新しいお家

子どもたちは手紙を見て興奮して喜んでいました。また、ウサギの先生とキララがテレパシーで話ができることに子どもたちは驚いていた。改めてウサギを大事にしてあげようという気持ちになり、ウサギのことに思いを寄

せる声も聞かれた。

また、エピソード4にも示したように、キララとナナの餌箱を向い合せにすることとその理由を聞いた子どもたちは、ウサギの様子をよく見ながら、「キララとナナが顔を合わせてたよ」「キララがウサギの先生から家もらったよってナナちゃんに言ってたんよ」「テレパシーでナナとキララと3人で話してたんかも!」と友だち同士で会話している姿も見られた。

### (2) エピソード5の考察

エピソード4にもあったように、“ウサギの先生”が幼稚園にやって来た時に、“ウサギの先生”は、「ウサギの国からやってきました。今日はみんなに会うために人間の姿になってきました」と子どもたちに語りかけ、子どもたちは大喜びであった。エピソード5のようにキララの家を広いものに買い換えようという話になった時に、教師は子どもたちに内緒で事前に大学と連携をとっていたのである。新しいケージを幼稚園で購入するにしても、子どもたちにとってはウサギの先生からプレゼントしてもらったという方が、よりウサギの立場を身近に感じたり、“ウサギの先生”から教えてもらったことが強く印象づけられたりするのではないかと考えたからである。その結果、教師が予想したように子どもたちは大喜びであり、エピソード4の際に“ウサギの先生”から教えてもらったことと関連づけながらウサギの様子を見ている姿が見られた。このことから、ウサギのことについて子どもたちと考える場ができた際には、その内容を強く印象づける工夫をすることで、子どもたちはよりウサギのことを思いやる心情を育むことができるのではないかと考えられた。

## 6) 2013年12月

### (1) エピソード6

夜がとても寒くなって来たので、寒い時期に備えてウサギのためにどうしたらいいかを子どもたちと考える場を設けた。(以下の会話 T:教師 C:子ども)

T「夜寒くなってきたねえ。みんなのお家も寒い？」

C「寒くないよ。エアコンあるもん」「窓閉めてるもん」

T「そうよねえ。キララもナナも先生の部屋にいてでしょう。先生たちがいる時はエアコンがついてるから暖かいんだけど、帰る時はエアコン切るからとっても寒いよ。ナナたち大丈夫かなあ？」

C「ずっとエアコンかけてあげてればいいじゃん」

T「それはできないよ」

C「ええっ？」

「じゃあ、なんかでお家作る？」

「段ボールとかで」



ウサギの家カバーを作ろう

以上のような会話を経て、段ボールでウサギの家を作ることにした。ケージ全体を覆うことのできる大きさの段ボールに絵を描いたり、折り紙を貼って飾りしたりした。

子どもたちなりに一生懸命作った家のカバーであったが、隙間が多かったり丈が短かったりした。そこで、大学の共同研究者に子どもたちの様子を知らせ、再び子どもたち宛てに手紙を書いてもらうこととした。

キララちゃんとナナちゃんのお友だちのみんなへ  
こんにちは。ウサギの先生です。みんな元気ですか？風邪をひいたりしていませんか？寒いのでウサギの国のウサギ村でも風邪をひくウサギがではじめています。ウサギの先生も鼻みずが出ているのであたたかくして過ごしています。

この間キララちゃんとお話していたら「お友だちが私のお家にダンボールのカバーを作ってくれたの。名前も書いてあるし良いでしょう。ふふ。夜は暗



隙間がある家

くて安心して眠ることができるから嬉しいな。でもね、カバーが少し短くて時々隙間風が入ってきてしまうの。もうちょっと長かったら嬉しいのだけれど、ウサギの先生からみんなにお願いしてもらえないかしら？」と言っていました。そこで今日はみなさんにお願ひがあります！キララちゃんとナナちゃんのお家にカバーをかけた時、夜中に冷たい風が入ってきそうなき間がないか、よ〜く見てあげてください。もしも「ここから風がたくさんはいるよ！」という場所があったら、ダンボールのカバーを大きくしてふさいでほしいな。ウサギの先生からのお願いです。ウサギ達は幼稚園のみんなよりも体がずっと小さいので、お家が寒いとあつという間に体が冷たくなってしまいます。それに、キララちゃんもナナちゃんもおばあちゃんだから、一日じっとしているでしょ？だからみんなみたいに運動したり遊んだりして体をあたたかくできないんです。お家があたたかくないと病気になるので、お家をあたたかくする方法が他にもないか考えてくれると嬉しいな。

クリスマスやお正月の頃にはもっと寒くなると思うので、これからもキララちゃんとナナちゃんの様子をよ〜く見てあげてね。もちろん、みんなも風邪をひかないように、手洗いうがいもしっかりとしてね！

ウサギのせんせいより

ウサギの先生からの手紙を受けて、再度子どもたちは以下のように家を作り直した。

- ・ケージの上部に、段ボールで開閉できる窓を作った。
- ・家の丈を長く継ぎ足して、下の隙間をふさいだ。
- ・段ボールの家の取り外しができやすいように穴をあけて取っ手を作り、その上にさらに段ボールでカバーをして隙間がないようにし、取っ手を使いたい時だけカバーを外せるようにした。

### (2) エピソード6の考察



隙間がない改良した家

高齢ウサギのための寒い時の飼育方法について大学の共同研究者と連携して、以下の2点を中心に飼育環境の改善を試みた。

- ・ウサギは人間よりも体がずっと小さいので、家が寒いとあっという間に体温が下がる。
- ・高齢のウサギは動かずにじっとしている傾向があるので、家が暖かくなると病気にかかりやすい。

これらのことを、「ウサギの先生」からの手紙で知るといふ経験を通して、再び家作りに励む姿が見られた。最初に家を作った時にはややもすると装飾の方に傾向が向く傾向にあったが、2回目の時はウサギが寒くならないように家の機能に関心を向ける姿が多く見られた。ウサギに対する配慮の心の育みには、「ウサギさんが寒いだろうね」といった情感を揺さぶることはもちろん重要であるが、「ウサギの体は小さいので、人間よりも寒くなりやすい」という倫理的な思考ができるような情報を得る事も必要であることが分かった。さらに適切な情報を得た際に、自分たちなりにかかわることが可能な素材（ここでは段ボール）を用意しておくことも、ウサギに対する思いを行動に移すことにつながるものと考えられた。

## 7) 2013年12月

### (1) エピソード7

年度当初のA児は、飼育当番をしていても「くっせー」と笑っていた。9月の避難訓練の前日には、みんなで紙芝居を読んで避難の仕方を確認している際に、子どもたちの中から「キララちゃんとナナちゃんはどうするの?」「逃げれるようにせんといけんじゃん」「(紙芝居に出てきたカメのように)先生が(ウサギを)ポケットに入れて逃げて!」「でも入らんよ」という声が出てきた。しかし、その時もA児は会話に入らず来ようとはしなかった。

次の日の避難訓練の直後に、A児が教師に「今日はウサギは逃げたん?」と尋ねた。教師が「今日は先生とは一緒に逃げてないんよ」と答えると、「やっぱりポケットに入らんけん、いけんじゃんか!」と真剣な表情で訴えた。前日にはウサギの避難に関する会話に入らず来ようとはしなかったA児であったが、実は会話の内容が気になっていたことがうかがえる。

12月になって、エピソード6で紹介したように、みんなでウサギが寒くならないような家を作ったが、その際に、A児は一人で黙々と段ボールを組み合わせて箱にし、上側と側面の一部を切っていた。「何を作っているの?」と尋ねると、A児は「ナナちゃんとキララちゃんのだよ」といって熱中している。そして「じゃーん、できた。逃げれるやつ」と満足そうに言っている。再度「何ができたの?」と尋ねると、A児は「逃げるやつ。火事のやつ」と言っていた。そこで数か月前にウサギの避難について話題に上がったことがA児

の心の中でつながっていたことに初めて気づいた。「わあ、これならナナちゃんとキララちゃん安心だね」と声をかけると、A児はウサギのいる職員室に自分が作った避難用の箱を持っていった。

A児は、職員室にいる教師に「これはウサギの家です」とき然とした表情で話すと「もうウサギさんの家はみんなが作ってくれてるし、どうしてAくんが持っ



ウサギの避難用の家

て来てくれた家は小さいの?」と尋ねた。すると「火事になったら、この家にウサギを入れて逃げてください」と堂々と答えた。「先生は、もし火事になったら子どもたちが逃げる

ことばかり考えていたけれど、Aくんはウサギさんが逃げることも考えてくれたの?」と再度尋ねると、A児は深くうなずいて保育室に戻っていった。

### (2) エピソード7の考察

A児は、年度当初の飼育当番時に「くっせー」と笑ってばかりいる姿が見られていたので、今回どのような経緯でウサギの避難用の家まで作るようになったのか、A児の心の背景まで推察することはできないが、A児の成長に大きな喜びを感じた場面であった。

年長児が飼育当番を通してウサギにかかわる際には毎年様々な姿が見られるものである。高齢なウサギに思いを寄せる姿もあるが、中にはウサギが苦手だったり、無関心だったりする姿も見られる。子どもによってウサギへのかかわり方が多様であることは自然であり、個々に応じた方法でかかわっていくことが必要である。また大切なことは、丁寧にお世話しようとする教師の姿や、大学の共同研究者からの適切な情報をもとにして常にみんなで話し合い、考える場や時間があるということがウサギを囲む環境にとって重要ではないかと考えられた。

## 4. 総合考察

### 1) 高齢ウサギの適切な飼育方法

子どもたちや教師が飼育活動を通して悩んだことを大学の共同研究者に相談したことや、共同研究者が実際に飼育の様子を見て気づいたことを通して、高齢のウサギの適切な飼育の仕方として明らかになったことを以下のようにまとめた。

- ・人間より小さい体のウサギは、特に高齢の場合、暑さ・寒さがこたえるので、温度調節ができる工夫をした方がよい。
- ・高齢のウサギをケージで飼う場合は、過度な刺激を与えることは禁物なので、あまり移動させない方がよい。
- ・高齢のウサギが複数いる場合は、個別飼育が望ましいが、餌箱などを向かい合わせにして、互いの存在を認識できるようにするとよい。
- ・ウサギをケージで飼う場合は、ウサギがリラックスできるように、ゆっくりと寝る場所を確保できるスペースを与えることが望ましい。
- ・ウサギを休ませたい時や、人の出入りが多い時は、ケージの上から布や段ボール等をかけて、外からの刺激を遮断できるようにするとよい。また、トイレも薄暗い方が落ち着く。
- ・ウサギは一日2回、朝と夕方にエサを食べる。ウサギの様子をよく見て、古い野菜は捨てて新しいものにかえる。

## 2) 高齢ウサギとの関わりを通した心の育み

教師は、高齢化しているウサギに対して子どもたちがウサギの状況を感じとりながら思いやりの心をもって接してほしいと願ってきた。大学の共同研究者との連携により、高齢なウサギにかかわる子どもたちの心を育む支援の在り方として以下のことが明らかになった。

- ・子どもたちがウサギの状況を身近に感じたり考えたりすることができるように、子どもたちと教師が共に考える場を設けることが効果的である。その際には、子どもたち自身の過去の経験や現在の生活と関連づけるような教師の言葉がけの内容と、言葉がけのタイミングが必要である。
- ・ウサギの飼育方法を習得していく際には、具体的なかかわり方を知ること、人間に置き換えながら理解できるようにすること、かかわり方の根拠になる理由や適切な認識につながる情報をきちんと添えることが大切である。飼育方法を習得することに終わるのではなく、ウサギの立場をより身近に感じることができ、思いやりの心をもって接することができると考えられる。
- ・ウサギとのかかわりを通して子どもたちの心を育むためには、子どもたちを取り巻く環境構成への配慮が必要である。具体的には、子どもたちの行動やつぶやきなどからどのようなことに心動かされているのかをとらえ、その思いが実現できるようなものや、自分たちなりにウサギのためにかかわれる素材などである。
- ・子どもたちの実態として、ウサギに心を寄せる姿・無関心な姿・苦手意識をもっている姿は様々である。子どもたちの個人差に応じてかかわると同時に、丁寧にかかわろうとする教師の姿勢があるということや、ウサギのことについてみんなが話し合い、考える場や時間を積み上げていくことが必要である。

### 参考文献

- 1) 谷田創・木場有紀 (2012) 「幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性」『日本獣医師会雑誌』第32号, pp.48-56.
- 2) 谷田創・木場有紀・森元真理他 (2010) 「幼稚園における動物介在教育の実践-Cop-AAEの構築を通じた共同研究の試み」『学部・附属学校共同研究紀要』第40号, pp.295-299.